

ともに育てる。

景観のまち、みと。

問合せ▶都市計画課(☎ 232-9206)

私たちが暮らすこのまちは、長い時をかけて、風景という名の物語を紡いできました。千波湖に映る光、城跡に重なる歴史の記憶、私たちの日々の営み。それらが寄り添い、水戸の景観を形づくっています。この特集では、そんな水戸の景観の魅力と、未来へ手渡したい思いを、紐解いていきます。

「景観」とは まちが紡いできた物語

「景観(けいかん)」という言葉には、ふたつの意味が重なっています。一つは、「まちに広がる風景」。もう一つは、「それを見つめ、感じ取る人のまなざし」。

長い時間の中で育まれてきた景観には、その土地の自然や歴史、文化、人の営みが息づいています。

景観とは、まちが紡いできた物語。私たちと風景との関わり合いそのものなのです。



景観づくりイメージ

景観づくりの意義

景観づくりは、まちの見た目をきれいにするだけの取組ではありません。良好な景観は、人々に快適さをもたらし、そこに関わる人々の、その場所への誇りや愛着を育みます。そして、訪れた人に良い印象を与え、まちへの関心や憧れを生み出します。

水戸らしい魅力ある景観を守り育てることは、誰もが住み続けたいと思えるまちづくりの土台となります。



水戸芸術館の広場の噴水で遊ぶ人々

新たな「景観計画」

市では、1990年代から景観を大切にするまちづくりに取り組んできました。2008年には、景観法に基づく「水戸市景観計画」を策定し、水戸らしい景観の形成を進めてきました。

それから年月がたち、社会や暮らしのあり方が大きく変化する中で、景観に求められる役割も変わってきています。こうした変化にしっかりと応え、水戸の魅力を未来へつなげていくために、今年、景観計画を新たな時代にふさわしい形へ進化させます。次のページから、新たな景観計画の一端を紹介します。



千波大橋から見渡す千波湖



(1)令和2年に復元された大手門
(2)昔の大手門(『水戸百年』より、市立博物館所蔵)
(3)令和3年に開催された水戸御祭(れい)行列の様子

この場所は、水戸が歩んできた歴史

弘道館・水戸城跡特定ゾーン

藩校の風格、復元された大手門や二の丸角櫓、そして深い緑に包まれた土塁の線。まちなかにありながら、時の流れがゆるやかな風景があります。市民の手で少しずつよみがえってきた歴史の風景は、今を生きる私たちに、過去と未来をつなぐ記憶の大切さを語りかけてきます。

01

土と緑に包まれた、水戸城の記憶

かつて水戸の台地に築かれた水戸城は、天守を持たずとも、土塁と堀に囲まれた壮大な姿で人々を魅了してきました。藩政の中心として機能し、城下町と一体となつて水戸の礎を築きました。そして今、水戸城の土塁や堀、弘道館のたたずまいが、往時を語りかけてくれます。

02

よみがえる城の記憶―大手門と二の丸角櫓の復元

震災などにより大半が焼失した水戸城跡に、かつての姿がよみがえりました。令和2年に復元された大手門、翌年に整備された二の丸角櫓と土塀。どちらも天保年間の姿をもとに、史料や発掘調査に基づいて復元されました。寄附や地元職人の手仕事など、多くの想いと力が重なり合つて完成した復元事業は、まちの新たなシンボルとして、歴史を語り続けています。

03

歴史とまちなみが調和する景観のしくみ

弘道館や水戸城跡のあるまちなかでは、歴史の趣と都市のにぎわいが調和しています。この風景を守り育てていくために、市は「都市景観重点地区」や「屋外広告物特別規制地区」を指定し、地域の特性に応じた景観づくりを進めています。

歴史ある建物や緑に調和するよう、広告の色や設置場所にも配慮を重ね、建物や通りが少しずつ整えられてきました。

一つ一つの取組が、落ち着きと風格のあるまちなみを形づくりります。



二の丸角櫓の下にあるコインパーキングの看板は、歴史的景観に調和するよう穏やかな色彩に改修されました。

Interview

弘道館や水戸城跡には、学校や図書館が立ち並び、平日・休日を問わず穏やかな時間が流れていると感じます。白壁の続く「水戸学の道」は散歩にうってつけです。

私たち家族は、弘道館の周りの環境に惹かれ、水戸市に移住してきました。

大手門周辺では、ビアフェスや梅まつりなどのイベントが開催されることもあり、そのときには大いににぎわいます。

「ハレ」と「ケ」の両方を楽しめる、豊かな時間を過ごせる環境がここにはあります。

弘道館の近所に住む 倉澤晃子さん

千波湖の水面に空が映り 偕楽園の梅がやさしく香る

偕楽園・千波湖特定ゾーン

※「特定ゾーン」…景観計画における、地域の特色を活かした景観づくりを進めるエリア

この場所は、自然と歴史が育んできた水戸の誇りです。水や緑が織りなす風景のなかで、人々は散歩を楽しみ、四季の移ろいに心をゆだねます。まちなかにありながら、静けさとにぎわいが調和するこの空間は、過去と未来をつなぐ、水戸らしい景観の象徴です。

01

千波湖の記憶 時を映す水面

かつて、今よりもはるかに広大だった千波湖。水戸のまじともにも形を変えながら、湖は静かに人々の暮らしを映しつづけてきました。観覧車がまわり、こどもたちの笑い声が響いた昭和の遊園地、そして今、水辺を走る人、カメラを構える旅人。

変わりゆく時代のなかで、千波湖は、これからも人々の営みと季節の移ろいを映します。



(1)かつて千波湖畔にあった遊園地レイクランド(『水戸百年』より)
(2)千波湖畔で写真を撮る人
(3)梅まつりににぎわう偕楽園

02

風致と調和が育んできた やさしい風景

偕楽園や千波湖のまわりには、長く愛されてきた風景があります。その美しさを守るために、市は、この地域を「風致地区」や「屋外広告物特別規制地区」に指定してきました。木々のざわめき、鳥の声、水辺の静けさ。目に映るだけでなく、心で感じる「風致」という豊かさを大切に、建築物、看板の色や高さなどにも工夫を重ねてきました。それは、まちと自然が寄り添う、水戸らしい景観を未来につなぐための、工夫のかたちです。

03

千波湖に 新しい風景が生まれます

千波湖の湖畔に、新たなにぎわいの場が生まれようとしています。この場所を、もっと魅力ある空間へと育てていくために、市は民間事業者とともに、整備を進めています。

訪れる人が思い思いの時間を過ごし、心に残る風景を持ち帰ることができるよう。ここから、次の風景が紡がれていきます。



新たなにぎわい創出拠点イメージ(令和8年春オープン予定)



景観づくりのイメージ

Interview

普段は退勤後に家の周りを走る人が多いですが、気分転換をしたいときに千波湖の周りを走っています。1周3kmの距離がちょうど良く、開けた空間で、走りながら良い風が吹いていると感じます。

また四季折々の花々など、季節によって少しずつ違う景色が見られるので、来るたびに新しい発見がありますね。



千波湖でランニングをする 小野湧真さん

01 **芸術・文化とにぎわいが交差する場所**

まちなかに立つ水戸芸術館の塔は、遠くからでもこのまちなかの中心を知らせてくれます。令和5年、隣合うように市民会館が開館し、芸術文化の拠点として、さらに人が集い語り合う風景が生まれました。通りを歩けば、コンサートの余韻や、アートに触れた人々の笑顔があふれています。芸術文化と暮らしが自然に溶け合うこの場所は、人のにぎわいと温もり、現代と未来が同時に息づいています。



メインストリートを歩けば、光と風が行き交う通りや、心に触れる風景に出会えます。芸術や文化が息づく建物や空間には、時の流れが刻まれ、今、居心地のよさとにぎわいの芽を育てる取組が始まっています。



(1)令和5年に開催したMitori Oフェスの様子 (2)夜の宮下銀座



市内には今と昔の地図を重ねた案内板が20基あります。まち歩きをしながら探すのも楽しいかも…

02 **時間の重なりが息づくまち**

古地図に記された町名、今も暮らしを支える商店街。まちなかには、時代ごとの営みが折り重なり、今の景観が形づくられています。昔のたたずまいを残す建物や、新たな姿を見せる通りは、まちの営みの記憶を伝えてくれます。まちの積み重ねの中にある個性を大切に、まちの表情を受け継いでいく。水戸らしい景観づくりの形です。



(1)万葉曝井(さらしい)の森 (2)銀杏と水戸八幡宮



あじさいが彩る風景の中に、歴史と自然が穏やかに息づいています。この地域は、歩くほどに印象に残る景観が残っています。

03 **暮らしの風景を、次の時代へ**

歴史とともに歩んできた下市のまちは、今、変わりゆく時を迎えています。日々の暮らしに寄り添うまちづくりが、これまでに求められています。新たな景観計画では、暮らしの質を重視した方針を新たに位置づけ、若い世代の市民と協働しながら、「住んでいてよかった」と思えるような日常の風景を育てていく取組を進めます。目指すのは、地域に眠る資源を活かした、知恵と熱意によるまちづくり。未来を見据えた一歩が、いま踏み出されています。

あじさいと歴史が重なる風景

徳川光圀公が好んだ寺の庭は、保和苑と呼ばれるようになり、やがて保和苑として親しまれてきました。重厚な社殿をもつ八幡宮や、古代の姿をとどめる愛宕山古墳も、この地域の歴史を物語る存在です。湧水や緑に囲まれた環境と、初夏に咲くあじさいの風景が、訪れる人にこの地ならではの魅力を伝えています。四季折々の変化を通じて、心に残る景観が育まれています。



水をたたえる備前堀、季節の祭りににぎわう吉田神社、商人の息づかいが今も残るまちなみ。歴史を語る風景と、安心して過ごせる日常が交差するもう一つの水戸。そんな景観が、地域の人の手で守られ、育まれています。

02 **水面に揺れる祈りー 備前堀の灯ろう流し**

夏の夜、備前堀の流れに揺れる灯ろうのあかり。銷魂橋から三又橋まで、オレンジ色の光が水面を彩る幻想的なひとときとして、先祖への祈りや平和への願いをのせ流れていきます。この行事は、地元の方々が中心となり守り続けてきた、夏の風物詩。商店街と地域の人々のつながりの中で、地域の記憶をやさしく照らし、人々の記憶に刻まれていきます。



01 **備前堀の風景に調和するまちなみづくり**

江戸時代に掘られた備前堀は、まちの記憶を今に伝えていきます。この水辺と、水辺に寄り添うまちなみを大切にするため、備前堀の沿道地区の一部を「都市景観重点地区」に指定し、ゆるやかな和の趣を生かした景観づくりを進めています。地域の人が中心となって育んできた、この場所ならではの落ち着きと潤いのある景観を、次の世代へとつないでいきます。

歴史とともに歩んできた下市のまちは、今、変わりゆく時を迎えています。日々の暮らしに寄り添うまちづくりが、これまでに求められています。新たな景観計画では、暮らしの質を重視した方針を新たに位置づけ、若い世代の市民と協働しながら、「住んでいてよかった」と思えるような日常の風景を育てていく取組を進めます。目指すのは、地域に眠る資源を活かした、知恵と熱意によるまちづくり。未来を見据えた一歩が、いま踏み出されています。



「ためしもいち!」始動ー

「ためしもいち」は、市民団体「さととし」と地域の人々で、下市エリアを舞台に、地域に眠る資源を活かし、「やってみよう」という思いをかたちにするプロジェクト。雑貨屋や本屋を開いてみたい。そんな小さな夢を“ためしてみる”機会を、地域の人々とともに紡ぎます。



さととし代表 中村彩乃さん(左) 川島飛鳥さん(右) 「さととし」とは…下市と都市部の両方で活動し、地域の課題解決と新たな魅力や価値を生み出すことを得意とする団体です。

Comment

400年の歴史を持つ下市エリアで、11月1日(土)、高校生から50代まで多様な10名の「ためしもいち」参加者が、それぞれの「やってみよう」を実践します。皆さんにも足を運んでいただき、下市の景観や営みをいつもと違う視点で体験し、まちの魅力や可能性を再発見できる1日になればと思っています。暮らしの延長線上で、「やってみよう」をまちで試すと、どんな変化や発見があるのか、私たちも楽しみです!



「ためしもいち」の活動内容や今後の予定など、詳細はこちら